

丸山雍成教授退官記念号の刊行にあたって

有馬，学
九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化資料室：室長

<https://doi.org/10.15017/1559858>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 40, pp.none-, 1996-03-31. Research Institute Cultural History, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



丸山雍成教授退官記念号の刊行にあたって

丸山雍成教授は本年三月三日をもって、九州大学大学院比較社会文化研究科を停年退官される。同教授は、昭和三二年三月に東北大学文学部国史学科を卒業後、同大学院文学研究科修士課程を修了、同四〇年三月に同研究科博士課程を単位修得退学後、埼玉県蕨市史編集委員会委員等を経て、四三年四月に駒沢大学文学部講師に就任、同助教授を経て四八年四月に九州大学文学部附属九州文化史研究施設助教授に就任され、文学部および大学院文学研究科で国史学（日本近世史）を担当された。六一年七月に教授に昇任されるとともに、六二年四月から平成六年六月まで九州文化史研究施設長を併任され、同研究施設の充実と同研究施設を中核とする学術研究の発展に寄与された。平成六年六月に九州大学の改組にともなって、大学院比較社会文化研究科に配置換となり、地域資料情報講座を担当、歴史資料学という分野で新たに研究と学生の指導にあたられた。

この間、久留米大学商学部、熊本大学文学部、鹿児島大学法文学部、東北大学文学部等の講師を兼ねられ、またインドネシア大学大学院日本研究科客員教授を勤められるなど、広く学生の教育に貢献してこられた。また、日本古文書学会評議員、南島史学会評議員等を歴任し、学会の発展に寄与されるとともに、昭和五三年以来永きにわたって文化財保護審議会専門委員を勤められたほか、福岡県文化財保護審議会専門委員、福岡県史編纂専門委員会顧問、名護屋城跡並に陣屋跡保存整備委員会委員、「歴史国道」選定委員会委員等を歴任され、学術研究の社会的還元にも尽力されてきた。

同教授は日本近世史研究において多くの業績を残されているが、とりわけ高い評価を獲得しているのは、言うまでもなく日本交通史の分野における業績である。その成果の代表的なものの一つが、大著『近世宿駅の基礎的研究』

丸山雅成教授退官記念号の刊行にあたって

第一・第二(昭和五二年、吉川弘文館)であり、同書によって東北大学から文学博士の学位が授与された。さらに同教授の近世交通史研究の集大成とも言えるのが、『日本近世交通史の研究』(平成元年、吉川弘文館)であり、同書は参勤交代、宿駅、関所、口留番所など近世交通史上のあらゆる問題を取り上げて精密な実証的検討を加えたものである。

同教授の交通史研究は、日本において古代以来、国家が交通政策を極めて重視していることに着目し、それぞれの時代の国家の性格は交通政策の検討から解明することが可能であるという視点に立ち、制度史、社会経済史的観点のみならず、国家史、幕藩制史研究という観点から交通史を位置づけようとしている点に、最大の特徴があると言えよう。

以上の多年にわたる交通史研究の成果は学界において高い評価を受け、平成六年六月に日本学士院賞を授与されるという榮譽に輝いたことは記憶に新しい。

もちろん、同教授の研究分野は交通史に限られるものではなく、広く村落構造、農民闘争、村落祭祀、武士思想など多岐にわたっている。近年では、「武家諸法度」や「慶安の御触書」等の再検討を行われ、後者について、後世に作られたものであるという教授の提起は通説化しつつある。

同教授はまた、九州地域史についても多くの業績を残されており、『佐賀藩の総合研究』正・続(共著、昭和五六、六二年、吉川弘文館)や、自ら共同研究を主宰された『前近代における南西諸島と九州』(編著、平成八年、多賀出版)、『九州・その歴史的展開と現代』(平成六年、文献出版)等はその代表的な成果である。

同教授のこのような多年にわたる研究・教育の主要な拠点となったのが、九州大学文学部附属九州文化史研究施設であったことは言うまでもない。教授は九州文化史研究施設を中心として、ご自身の研究や学部学生・大学院生の指導はもとより、多くの研究会や共同研究を組織してこられた。それだけに、先年の改組の際に、同研究施設を

独立の資料センターに発展させようという当初の構想が遂に目の目を見ずに終わったことは、教授にとっても誠に残念な結果であったと拝察する。この点は、全学的な改組の経緯の中で回避しがたいさまざまな問題が生じた結果とはいえ、直接改組の衝にあたった私どもが責を負うべきことであり、教授のご心労を煩わせたことをお詫びしなければならぬ。

とはいえ、「九州文化史」は健在である。制度的な位置づけこそ、大学院比較社会文化研究科附属の資料室と変わったが、紀要の誌名も看板も「九州文化史研究所」のままであり、場所も中味も変わっていない。私どもは、教授のこれまでのご努力を継承し、さらに発展させるべく知恵と力を出し合っていきたいと考えている。今日、全国の大学で大学改革が進行する中で、大学における史料保存機関が如何にあるべきかが問われている。その中で私どもがどのような回答を提示できるかは、なお若干の時間をお借りするほかはない。しかし、私どもは史料の収集・整理・閲覧機能の一層の充実はもとより、文献史料の枠にとどまらない歴史資料論の構築と、それをふまえた共同研究の推進、さらには大学院比較社会文化研究科の地域資料情報講座と有機的に連携した教育・研究体制の拡充等の方向を発展させることの中に、「九州文化史」の将来を展望しようとするものである。

「九州文化史」は永い歴史と実績を有する史料保存機関・研究機関であり、その内容は「九州文化史」にかかわってこられた多くの方々の努力が結集された貴重な遺産である。私どもは「九州文化史」の歴史を継承しつつ、右に記したような将来への展望に実質を与えようとしている点で、単なる遺産管理人ではないと敢えて申し上げても不遜ではないと確信している。そのような意味を込めて、「九州文化史」は健在であることを、広く九州文化史研究所の今後に関心を寄せて下さる方々にご報告するとともに、それをもって丸山雍成教授の多年のご苦勞への謝意としたい。

大学院比較社会文化研究科

九州文化史資料室長 有馬 学